

陳 述 書

2019 年 6 月 21 日

原 告 松本好央
住所： 長崎県東彼杵郡川棚町

第 1 はじめに

- 1 私は、石木ダムが建設されれば家や仕事を奪われる長崎県川棚町岩屋郷川原（こうばる）地区に住む、松本好央（まつもと・よしお）です。

裁判官の皆様は、私が、生まれ育った川原に来たことがありますか。

春には菜の花が咲き乱れ、新緑の季節には緑が萌えるように輝いて小鳥がさえずり、初夏には蛍が飛び交い幻想的な光の世界に包まれ、秋には棚田が黄金色に染まります。

地域を流れる清流の石木川には、ここだけに生息している魚やカエルなどたくさんの貴重な生き物がいて、夏はたくさん子どもたちが訪れる格好の遊び場です。本当にすてきなところなので、ぜひ一度、現地を見に来てください。

- 2 私が子どものころから今日まで生きてきた44年の年月は、川原の家、川原の豊かな自然とともにいつもありました。一方で、私が川原で生まれ育ったこの44年は、ダムとの闘いの年月でもありました。

私たちの住み慣れたふるさとを永久に消滅させ、私たちの平穏な暮らしを根

こそぎ奪い去ろうとするこのダム計画が、いかに愚かで人権を無視したもののか、ダム水没予定地の地権者の一人として、そのことを裁判所にぜひわかってもらいたいと心から願っています。

これから、私や私の家族のこと、私たち家族がどういう思いで暮らしているのかについて説明いたします。

第2 川原で一番の大家族

1 家族構成

私の家族は、祖母と両親、私と妻、そして4人の子どもたちの4世代9人で暮らしていて、川原13世帯の中では一番の大家族です。

2 現在の居住者

我が家のメンバーを紹介します。

- ①最年長は、祖母のマツ（1926（大正15）年12月10日生，92歳）。
- ②私の父である松本昭弘（まつもと・あきひろ，1947（昭和22）年1月6日生，71歳）。
- ③母の順子（じゅんこ，1957（昭和32）年2月14日生，62歳）。
- ④そして、私（1975（昭和50）年1月23日生，44歳）。
- ⑤私の妻・愛美（まなみ，1974（昭和49）年9月19日生，44歳）。
- ⑥長男・拓朗（たくろう，1997（平成9）年10月3日生，21歳）。
- ⑦二男・晟志（まさし，1999（平成11）年5月1日生，20歳）。
- ⑧長女・晏奈（はるな，2002（平成14）年5月20日生，17歳）。
- ⑨三男・昂大（こうだい，2004（平成16）年5月22日生，15歳）。

このうち、⑥長男の拓朗は、今年4月から、仕事のため一時家を出ており、現時点の川原の居住者は8人です。

3 その他の家族

なお、私には、双子の姉である千布光代（ちぶ・みつよ，1975（昭和50）年1月23日生，44歳）がいますが、光代は、結婚して夫と2人の子ど

もと福岡県糸島市に住んでいて、介護福祉士をしています。

4 私たち家族の生活

(1) 父の昭弘は、中学を卒業後、15歳で川棚町内の鉄工所で働き出し、27年間その鉄工所に勤務して腕を磨いた後、1989（平成元）年に独立しました。独立後は、「あきもと鉄工」という屋号で、個人の鉄工所経営を始めました。「あきもと」という屋号は、松本昭弘の名字まつもとの「もと」と名前のあきひろの「あき」とをひっくり返して命名したものです。

独立して最初の8年間は、波佐見町と川棚町上組郷で工場を借りて鉄工所を営んでいましたが、平成9年に、自宅のすぐ横に自分の鉄工所を建て、住居だけでなく、仕事場もこの地に構えることとなりました。この川原の鉄工所で、父と私の家族全員が生計を立てています。

(2) 母の順子は、1974（昭和49）年に父と結婚し、父が独立してからは、父の鉄工所で働くようになり、現在も、鉄工所の仕事を手伝っています。

(3) 私は、ちょうど中学卒業を前に、父が独立して鉄工所を始めたので、その仕事を手伝おうと進路を決め、大村工業高校の機械科に進学しました。卒業後、私は、すぐに「あきもと鉄工」に就職し、父の指導を受けながら、鉄の加工や溶接作業をしています。

(4) 妻の愛美は、川棚町内の病院で、看護師をしています。

(5) 長男の拓朗は、大村工業高校を卒業後、佐世保市の会社（道路建設の仕事）に就職し自宅から通勤していましたが、今年4月から、溶接の勉強をするため、香川県丸亀市の造船所に勤めています。現在は、造船所の寮で暮らしていますが、将来は、溶接の技術を身につけて、私と父の川原の鉄工所で一緒に働く予定です。

(6) 二男の晟志は、佐世保実業高校を卒業後、同校附属の専門学校で、自動車整備士の資格をとるべく勉強しています。

(7) 長女の晏奈は、川棚高校の2年生です。

(8) 三男の昂大は、川棚中学校3年生です。

- (9) このように、父と母、それに私は、川原の仕事場で仕事をし、妻や子どもたちは、この川原の家から、それぞれの職場や学校に通っています。

第3 石木ダム問題との関わりやダムに対する考え方、故郷への思いなど

1 祖父の思い（現住居地で暮らしを立てるようになったいきさつ）

- (1) 私たち家族が、ここ川原に住むようになったきっかけは、私の祖父（昭弘の父）の意向でした。

祖父の茂（しげる、1920（大正9）年9月30日生）は、もともと川原から車で5分ほど石木川を遡った上流の中ノ川内（なかのこうち）という地区に住んでいました。

祖父は、採石や仏壇の修理などの仕事に出かけるとともに、そこに広がる棚田で、祖母とともに米などを作り生活していました。

- (2) ところが、今から57年前の1962（昭和37）年、長崎県が、石木川にダム建設事業を計画していることが明らかになりました。

祖父は、石木川流域の美しい自然を破壊するダム計画に反対でした。

祖父は、父が結婚し、孫である私と光代の双子が生まれた翌年の1976（昭和51）年、父と相談し、将来の子どもたちや孫たちのため、この素晴らしい川原の土地をずっと守り続けようと腹を決め、ダム建設が計画されている川原の地に、あえて家を新築しました。祖父が建てたその家に、今も、祖母をはじめ私たちの家族が一緒に住んでいます。

- (3) 祖父は、ダム建設が白紙撤回される願いが叶わぬまま、10年前の平成21年1月14日に88歳で他界しましたが、最後まで、ダム問題の行く末を気にかけていました。

- (4) 茂とともに体を張ってダム建設に反対してきた祖母のマツも、茂の思いを受け継ぎ、この土地を、子どもたちや孫たち、ひ孫たちに残したいと強く願い、92歳になる今でも反対運動に参加しています。

2 私がダム反対運動に目を向けるようになった子どものころの原体験

(1) 私が、石木ダム建設を進める権力の恐ろしさを初めて体験したのは、今から37年前のことです。

当時、私は7歳、石木小学校の2年生になったばかりでした。

(2) 1982（昭和57）年5月、濃紺の服を身にまとった大勢の機動隊が、突然、川原にやってきました。

長崎県が機動隊を導入して実施した抜き打ちの強制測量でした。

彼らは、僕らの土地を測量し、杭を打ちにやって来たのです。

最初、僕らは、ただただ怖くて、怖くて、震えていました。でも、大人たちは、杭を打たせまいと道路に座り込み、道を開けようとはしませんでした。

男性だけではなく、女性や、じいちゃん、ばあちゃんたちも腕を組んで座り込みました。

僕たち小中学生も、自分の意志で学校を休み座り込みに参加しました。

地権者だけでなく、支援者も大勢駆けつけてくれました。

大人たちは、この土地を守ろうと必死で立ち向かいました。

(3) それに対し、機動隊は、容赦なく、座り込みの大人たちをごぼう抜きにして力づくで排除していきました。

何人かの大人たちはけがをさせられました。

僕も、機動隊に抱きかかえられて、座り込みの列から排除されました。

それでも、大人たちは、歯を食いしばって、座り込みによる阻止行動を続けました。

そんな大人たちの姿を見て、僕たちも自然と手をつなぎ震える手に力を入れて「帰れ！ 帰れ！」と力の限り叫び続けました。

僕らの土地を守りたい、気持ちはただそれだけでした。

そんな行動が何日も続きました。

(4) 長崎県は、とうとう強制測量の中止に追い込まれました。

地元住民の人権を無視し、無理矢理、強制的に進めなければ実現できない

ダムにどんな公共性があるというのか。

あの時の出来事が、私の反対運動の原点であり、今の私たちの団結力の原点となっているのです。

3 不必要なダムによって生活基盤が奪われる理不尽さ

(1) あの強制測量から40年近くが経ちました。

ダムの計画が持ち上がってからすれば、50年以上が経ちます。

この間、石木ダムがなくても何も困りませんでした。

ということは、普通に考えれば、ダムの必要性がそもそもないということではないですか。

それなのに、私たちが反対し続けてきた石木ダム計画は、中止になるどころか、驚くべきことに、計画から50年以上経った今になって強制収用手続きがどんどん進み、いよいよ本格的工事に向けて動き出そうとしています。

なぜ今頃、50年前に計画されたものが亡霊のように動き出すのか、全く理解できません。

少なくとも、その土地で日々暮らしを営んでいる私たちの生活を奪ってでもダムを造る必要があることについて、納得のいく説明が行われたことは一度もありません。

長崎県や佐世保市は、何の利益もないダムのために、私たちに犠牲になれというのですか。

私たちが愛するふるさとで住み続ける権利よりも、ダム工事をする行政や業者の権利の方が、より価値が高いというのですか。

(2) 先ほども述べたとおり、私は、18歳から、父が個人で経営する小さな鉄工所で、父と二人三脚で働いています。

手伝いをする母も加えれば、三人四脚かもしれません。

私たちは、力を合わせて様々な鉄製品を作り出してきました。

コンベアーやローラーなどの部品、陶器を運ぶ台車や陶器を並べる棚などを加工、溶接するのが主な仕事です。

川原の周辺は、波佐見焼、有田焼、伊万里焼などの焼き物が大変盛んな地域であるため、「あきもと鉄工」の受注する仕事の半分以上が窯業関連の機械や器具の製作です。

現在、水没予定地で生業（なりわい）に励んでいるのは松本家だけであり、ダムができれば、仕事場であるこの鉄工所も、自宅とともにダムの底に沈みます。

そうなれば、当然、私と両親は仕事を失います。

私の家族全員が、この川原の鉄工所の仕事で生計を立てているので、私たちは、家や土地だけでなく、日々の生業という生活基盤そのものも奪われることになるのです。

年老いてきた父にとって今の仕事は生きがいであり、工場を奪われることは、父の生きがいが奪われるということです。

また、私には4人の子どもがおり、うち3人はまだ学生です。

この先、家族のために20年から30年くらいはここで仕事をしようと決めていた私にとっても、この仕事を失うことは子どもたちを養うことができなくなるという極めて切実な問題です。

強制収用が決定しても、この工場を失う現実には、想像もできないし、想像したくもありません。

これまで仕事で積み上げてきた人とのつながりや信頼関係をも壊されてしまう、私にとっては全てを奪われてしまうに等しいと感じています。

4 不必要なダム事業のことを知ってもらうことの必要性

- (1) この土地で日々暮らしを営んでいる私たちの生活を奪ってでもダムを造る必要性があることについて、納得のいく説明が行われたことは一度もない中で、住民の意思を全く無視して、事業はどんどん強制的に進められようとしています。

私は、このことに強い危機感を持っており、これまで反対運動を担ってきた父母ら親の世代に代わって、自分たち若い世代が運動にもっと積極的に関

わっていかなければならないとの思いを強くしています。

- (2) 私は、ダムを造る必要性の根拠がでたらめであること、ダムによって失われるのは自然だけではなく、そこで暮らす住民の生活や地域社会であること、長崎県や佐世保市は人権無視の強引なやり方で事業を強行していることなどについて、とにかくできるだけたくさんの人にこの問題の本質を知ってもらうことが何よりも大切だと考えています。
- (3) そのため、私は、この問題を発信する機会があれば、できる範囲で、仕事を休んででも取り組むようにしています。
- (4) 活動をいくつか紹介すると、2016（平成28）年10月30日には、ダム予定地で、小林武史さんやsalyuさんら著名なミュージシャンをお招きしてコンサートを開催しました。
私も、地元の実行委員会の中心で活動しましたが、700人が詰めかけ大好評でした。
- (5) 2016（平成28）年11月20日には、若者グループが制作した石木ダム問題の動画上映のイベントで話をしました。
- (6) 2017年には、川原の里山に暮らす私たち13世帯のドキュメンタリー映画「ほたるの川のまもりびと」が完成しましたが、各地で開かれたこの映画の上映会にも多数参加し、地元の原状や私たちの思いについて話をしました。
- (7) 稲刈りや田植え体験も実施し、「ほたるの川のまもりびと」の映画をみて現地に来てみたかったという県外からの参加者とも話をしました。
- (8) この他にも、映画撮影地の案内やほたるの鑑賞会、ダム建設地の現地視察会、地元住民とのふれあい会、地元の虚空蔵山（こくぞうさん）の登山会など様々な企画を立てては、参加者とダム問題について語り合ったり、またその様子をSNSで発信したりしました。
- (9) SNSで川原の様子や企画の情報をたくさん発信したことで、気づけば全国各地に支援してくれる方もどんどん増えました。

他県で行われるイベントにも呼ばれるようになり、熊本県や福岡県での映画上映会や勉強会にも参加しました。

- (10) 2018（平成30）年3月25日には、音楽家の坂本龍一さんが地元を訪れ、その後、長崎市でトークイベントを行いました。スタッフとして関わらせてもらいました。
- (11) また、2018（平成30）年5月8日には、歌手の加藤登紀子さんが地元を訪れ、その後、川棚町で討論会とコンサートを行いました。それにもスタッフとして関わらせてもらいました。
- (12) こうした活動によって、石木ダムに関心を持つたくさんの方に繋がることができました。

長崎市や佐世保市の署名活動にも参加しましたが、そこで小学生が「石木ダムはいりません！」と大人たちに訴える姿を見て胸があつくなりました。

これからも子どもたちが楽しめるイベントなどを通して、ダム問題を発信していきたいと考えています。

5 ありのままの川原を取り戻したい

- (1) 私の妻が18歳で初めて川原にやってきたとき、ギョツとした顔をしました。

田んぼや畑のあちこちに、石木ダム反対のでっかい看板があったからです。

私は、そのとき初めて知りました。

こんな看板だらけの景色が普通でないことを。

私は、生まれてからずっと、この景色が当たり前の中で育ったのです。

それが異常だったということに気づかなかったのです。

- (2) 私たち住民が、先祖代々受け継いできた土地や家屋、生業、共存している生き物すべてを水の底に沈めようとしているのが、この石木ダムの建設計画です。

この地に暮らすきっかけとなった私の祖父は、「石木ダム建設白紙撤回」の願いもかなわぬまま、10年前に亡くなりました。

その祖父の思いを受け継ぎ，生まれ育ったこの土地を，子どもたちに残したい。

ごく普通の今の静かな暮らしを続けたい。

私たちの願いはただそれだけです。

私たちのこのわずかな願いを真正面から受け止めて下さい。

そして，ダム反対の看板のない，ありのままの川原の景色に戻して下さい。

以 上